

## 屏風に描かれた城郭鳥瞰図 新発見 会津若松城下絵図屏風

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原道晴

### はじめに

今年8月始め、福島会津の新聞社さんから所蔵する会津若松城下絵図屏風の取材を受け、書かれた年代と作者が明確な唯一の屏風、会津若松城下研究の基本絵図であると紹介したところ、「幕末会津の屏風新発見」として、社会面の上半分を割いて、大きく報道していただき、会津では大きな話題になっていると連絡いただいた。時を同じくして、地図情報の山岳展望図、鳥瞰図の世界を拝見し、城郭鳥瞰図に思いを巡らせた。

城郭研究家にとって、忘れえない幻の屏風がある、織田信長が狩野永徳に描かせ、天正9年イエズス会宣教師ヴァリニャノに贈り、天正10年天正遣欧少年使節からローマ教皇に献上された『安土山図屏風』である。此の2曲1双の屏風は半双の高さ6尺、幅12-15尺とされ、半双に安土の城下町、後半双に安土城が描かれていたといわれる。屏風はローマ教皇グレゴリオ13世によって、バチカンの地図回廊に展示されたといわれるが、当時の安土町を始め、関係機関の訪問調査に於いても、現在発見されていない。残片的なスケッチが残されているのみである。そもそも、この屏風の発見を目的として、しろはく古地図と城の博物館富原文庫を発足させたのであるから、思い入れは相当深い。夢物語ではない、かつて、あの名護屋城図屏風も今は屏風仕立てとなっているが、当初は某骨董商が下絵として買いだしたものであり、後に屏風にされただけである。下絵でない名護屋城屏風も後に発見されている。もちろん、安土山図屏風が日本で発見されることはない。しかし、下絵はあるはずである。日本全国の城郭絵図発見の情報をほとんど入手し、年々膨大な城郭資料を新たにしている現在、朗報を心待ちにしている。

### 1・城郭の鳥瞰図屏風

城郭図は作成目的により、関係者のみに秘匿される性格の幕用図や藩用図といった公用図があるが、屏風や鳥瞰図はもともと見せるために描かれているため、城郭絵図とは性格を異にしている。しかも、小型の城郭鳥瞰図は熊本城南面図のように刷り物や軸装され、錦絵に於いても、玉蘭斎貞秀や芳虎等の優れた鳥瞰城下町景観を見ることが出来る。手元にあるだけでも大阪名所一覧9枚、大日本国郡名所松前・高田・仙台・中村、京都一覧図画6枚二条城、東海道名所図絵12枚、東海道近江八景一覧図3枚膳所城、淀川八幡山勝景3枚淀城、大日本海陸名所図絵6枚、函館真景3枚、東京市区名所一覧3枚、熊本戦地の図3枚、**薩摩国絵図**3枚等連続パノラマの素晴らしい城下町景観が描かれる。屏風仕立てされる絵図は見せる物、大型であるものの2つの条件が重なる場合に限定される。小型

の枕屏風で城郭図は見たことがない。城郭そのものを描く屏風は聚楽第図屏風、大坂合戦最上屏風、名護屋城図屏風等それほど多くはないが、城郭を取り巻く合戦図屏風は非常に多く描かれている。大坂冬の陣屏風、大坂夏の陣屏風、長篠合戦図屏風、賤ヶ岳合戦図屏風等ほとんどの合戦図がある。城下町絵図で屏風仕立てのものは、記憶の範囲で会津若松城下絵図屏風の福島県立博物館本、鹿児島市立美術館の鹿児島城下絵図屏風、香川県歴史博物館の高松城下絵図屏風、**広島城の広島城下絵屏風**、片倉家所蔵白石城屏風が有名である。もちろん、江戸図屏風、洛中洛外図屏風は云うに及ばない。又、城郭が描かれる屏風としては、スケッチ感覚のものが道中図屏風や全国城郭配置図屏風が全国に残されている。これらの感性は錦絵の風景画に描かれる象徴的な城郭景観とほとんど変わらず、描画内容は検討を要する。

## 2・富原文庫本会津若松城下絵図屏風の公開

会津の新聞には新発見と報じられたが、屏風を公開したのはNHK大河ドラマ八重の桜放映にあわせ、平成25年の半年であった。東北の復興支援のため、安中市学習の森歴史博物館平成25年度企画展として、「富原文庫本会津若松城下絵図屏風展 新島八重のふるさと 会津の心」展を開催しました。安中で展示したのは八重の夫新島襄が安中藩士であるためである。当初、展示会の目的と構成について、東北大震災の復興、今何ができるか、東北を元気にしたい。新島八重ゆかりの会津を初公開資料で見る会津若松城下絵図屏風と会津若松城、市街図の初公開を計画。結果として、新出資料会津若松城下絵図屏風で壊滅する前の会津風景、会津の国家的活躍、蝦夷警備、品川台場、房総半島、京都守護職、大義のない無用な内戦を繰り広げた薩長、優柔不断な徳川慶喜、鳥羽伏見の戦い、会津戦争、斗南藩移住、荒廃した会津を明治35年農商務省明治35年会津土性図という生の資料で現実を直視、会津の復興、城跡の設計図、鳥瞰図、市街図、天守模型を展示し、会津魂に触れてみた。

## 3・会津若松城下絵図屏風について

本屏風発見の経緯は2012年6月オークションで落札、原所蔵先は不明ですが、出展者によると会津から出たもので、同時に道中図屏風6尺6曲半双屏風も同時に提示された。

屏風の形式は3尺6曲1双屏風、94cmx540cm、1扇巾45cmであった。

屏風の名称は記載がありませんが、描画内容と類似屏風の名称に統一するということから会津若松城下絵図屏風としました。ただ、描画範囲は広く、城下のみならず、周辺村々まで描かれています。

作成年代は辛亥と明記され、嘉永4年1851年新島八重6歳の時に描かれています。会津戊辰戦争が1868年ですから、さかのぼる事17年、破壊される前の美しい城と城

下町が描かれています。

作者は皎斎清光図之画と書かれ、朱印、「皎斎」、「清光之印」とあります。皎斎清光は本名大須賀清光、文化5年1808年生まれ、1875年明治8年6月17日67歳没です。この屏風は43歳の時の作になります。会津人物事典画人編坂井正喜によると、「会津城下の商家に生まれ、絵師に転向、佐藤香齋、遠藤香村、島貫盤月に師事、歴史画を得意とする」としている。

清光の江戸城登城風景図屏風国立歴史民俗博物館所蔵8曲1隻屏風は1847年8月諸藩の江戸登城と見学する庶民を克明に描いている、大野原追鳥狩図屏風は会津藩の軍事を描いた安政6年1859年の6曲1隻屏風、蛤御門合戦図等、藩政にかかわる絵図を多く残し、清光の会津藩における位置が特別のものであることを示唆している。

結果として、本屏風は作者と年代が明確な唯一の会津若松城下絵図屏風となり、今後の会津研究の基本資料となります。

#### 4・屏風の記載内容と記載領域の検討 500近い文字情報

本屏風は非常に細密な表現をされており、一部の文字は拡大鏡で判読を必要とするほどの細密表現で、500近い文字情報が描かれています。類似の屏風と比較検証しても、年代差が表される等、当時の実情を細かく表現しています。

会津若松城内が五層天守、御三階櫓、11基の2層櫓、多聞櫓、聖堂日新館、御薬園、割場に2層の鐘突き堂、城下に藩施設として、北学館、南学館、古川御屋敷、黒川御代官所、御用屋敷2か所、角場2か所、人参御役所、会所、御煙硝蔵2か所、御米蔵8か所、御酒蔵、御塩蔵、御本陣2か所、御番所、御厩、瀬戸場2か所等32か所が描画される。武家屋敷は藩士名が103軒表示されている。町村等は約200か所。街道は会津5街道と言われる日光山街道（下野街道ともいわれ、会津本郷から栃木へ、此の街道は会津防衛から考えると、幕府の援軍が入る道となる。今市まで128km、今の会津西街道）二本松街道（猪苗代湖の北。猪苗代城から中山峠を超える。越後街道、戊辰戦争の際は中山峠を通らず、北へ迂回して母成峠から猪苗代を經由して本街道に入り、滝沢本陣から甲賀口郭門、北出丸大手口へ進軍した。二本松まで60km）北米沢街道（会津から北へ米沢まで56km）、猪苗代街道（白河街道ともいわれ、滝沢峠から猪苗代湖の南を通り、白河へ69km、江戸まで260km）、越後街道（会津から西北、神指城跡の北を抜け、越後新発田まで津川を經由して92km）、領界までの距離表示は米沢領界、新発田領界、長沼領界、宇都宮領界までの表示。寺社は約120か所近くあり、別に宗派、石高を表示し、絵図中に寺社内の観音、天神、地藏、薬師、愛宕、稲荷、不動、文殊、弘法、荒神、天満、金比羅、白山、熊野、住吉、弁天、神明、墓、庵室等の記入がある。名所旧跡は温泉、瀧、桜がある外、蒲生、小笠原、芦名等の墓を表示。寺社明細が記入されている。

屏風は西からみた会津若松城下及び周辺を描く、右隻に南、左隻に北を描いている。右

隻に羽黒山、瀧之温泉、温泉道（東山温泉方向）、小田山（戊辰戦争の際は四斤山砲直径8, 6 cm、4 kg の弾丸）、湯川と小田橋、天神橋、中央に城内、郭内、左隻に飯盛山、さざえ堂、滝沢峠、瀬川、大塚山、磐梯山、最後に松窪村、下柳原村で仕舞している。

次に、描画領域を確定するために、500近くに及ぶ、文字情報の抽出を行い、福島県立博物館本との記載内容の比較検討を行いました。（福博本は視野が高いため、湯川と東側が見えている、富原文庫本は視野が低いため湯川が隠れている、視野が低いことによる表現が忠実である。表現地域はほぼ同じであるが、上部では福博本のエリアが広く、湯本村迄描かれ、中部では福博本に石風以南が描かれていない。南部では滝沢村の描写に富原文庫本では発展した状況が描かれる。以下相違を観察すると

右隻1扇福博本以後に御米蔵2か所が設置

右隻3扇福博本では小田橋に新橋、下野街道湯川に大橋、湯川に烏橋等の橋名記入

左隻6扇福博本は下居合村で仕舞、松窪村は未記入

福博本に以下の記載はない。○寺社明細○想町家数四千百四軒○町々木戸式拾八ヶ所○自船番所五拾七ヶ所○町在寺五百六拾六ヶ寺

侍屋敷に103名の人名記載があり、福博本とでは12名の屋敷移動が見られ、検断といわれる半官半民の町年寄15名のうち14名が明記されている、藩士はおおよそ300石以上の名前が記入されている。

会津若松城下絵図屏風で大須賀清光著作はこれまで二点存在する。

1・旧会州一蔵品館本 無落款 6尺6曲一隻屏風、154 x 361 cm 年代未記入 屋敷人名55名 弘化元年1844年—2年作と推定されている。

2・福島県立博物館本。高瀬家旧蔵 6尺8曲一隻 135 x 484 cm 年代未記入 屋敷人名143名 本屏風は会州本より後とされているので、製作年代は1843—1850年となる。

記載されているすべての文字情報を明治43年の2, 5万分1地形図に落とししたところ、絵図は会津城下町を中心に、東西4 km、南北6, 5 kmを描いていることが判明しました。

## 5・会津若松城について

天正18年1590年秀吉が会津に入り、蒲生氏郷35歳に42万石、さらに92万石を与え、文禄元年1592年夏から2年5月まで地名を若松とし、城を鶴ヶ城として、伊達、徳川の抑えとした。城は湯川の扇状地に構築され、台地の先端に本丸、東に2の丸、3の丸、弱点である東に3重の防備を行い、加藤明成の時代に堅固な北、西の出丸が構築され、白河街道の付け替えとともに、大手が東から北へ変更され、北出丸東口が大手となった。大手の防衛は正面の出丸、側面の本丸、背面の二の丸隠し郭の3方から行われ、戊辰戦争に於いても新政府軍はついにここを突破できなかった。南方が弱点となるが、当時は牛沼があり、堀の役割を果たしていた。

慶長3年1598年氏郷の死により、秀吉は上杉景勝120万石を与え、伊達、徳川の抑えとし、秀吉死後、小田山からの弱点を克服するため、西へ4kmのところろに神指城を構築、家康に対応したが関ヶ原の敗戦により未完に終わった。

慶長5年1600年関ヶ原後、家康の娘婿蒲生秀行を60万石で再度会津に移封。上杉の抑えとしたが、蒲生家は断絶した。その後、加藤嘉明40万石で白河街道付け替え、鶴ヶ城大手変更、さらに、加藤明成が天守改築、北出丸、西出丸造成。加藤家の滅亡により、寛永12年1643年保科正之（2代秀忠の4男3代家光弟）23万石、預領5万石共28万石、会津松平家藩祖として入府。9世226年幕末まで存続した。慶応4年1868年8月会津戦争、9月22日開城。城は明治7年1874年4月取り壊し、862円で売却された。昭和40年天守再建して今になる。

会津盆地は東西13km、南北34km。城下町は南東に位置し、標高210-230m、東西3km、南北2.5km。郭内は東西1.8km。南北1.2km。武家屋敷は400軒余り、郭内は3-7mの土塁と16-17mの水堀に囲まれ。16の郭門が設置、3か所は不明門。半鐘で割場からの火事を知らせた。大手は甲賀口門から北の出丸東門、郭外にも2400軒の屋敷、200前後の寺院。町方16000人居住、城内の規模は明治に毀された3の丸を含めて、東西760m、南北500m、ちなみに、神指城は東西560m、南北650mでした。

城は広大といえず、外郭も16もの城門があり、防衛上兵力が分散するが、会津松平家譜に伝える、保科正之の1国1城の小城は堅固成るを以て主とし、天下の府城は万民の便利安居を以て第一とす、これは江戸城を述べたものですが、会津城についても、江戸城の支城として、武田信玄の人は城、人は石垣、人は堀という考え方で、北部防衛戦線の拠点であって、北を仮想敵国と考えており、会津松平はここで戦うことを考えていない。戊辰戦争時の幕府の裏切りや南からの来襲は想定されていなかった。

## あとがき

大河ドラマ八重の桜による会津の賑わいから、ようやく落ち着きを取り戻した。会津の心を展示テーマに加え、その心意気に触れてみた。会津魂は素晴らしい。会津若松城下絵図屏風もいつの日か、会津に戻れば幸いかと考えて居る。